天鹽日記

Pt. A
1856.12

TALL TREE
LIBRARY

Japanese
Maps
1856
12

H-139(4)

東西蝦夷山川
地理取調紀行

天鹽日誌

多氣志樓藏板

凡例

一テレホと西部沿海十四里半より来て表地方二の大川を源に石狩上川ニウベツショコツ（モンヘツ）より境し一百五十四里を隔てる山中に土人あり（二百七十余人）

より散在して三分の一は屋天毋に二島（テウシ）（ヤギシリ）に住む時に戸籍（アイノカゾヒ）を

なるものとなれども元来蝦夷人（トマヽイ）は此川筋より移りしもの

一本名テレウレかと云ふ何時かテレホと称するもテレと梁の字ウレとちがへるもの

を誤り此川底に多く盤石の地あるを岩筋と唱て梁柵を結しやく故に

号して文士人の言る梁と言る柵と大吉此川筋に石の多き並へて延て成神

達の見て始めて言傳へしり余が己の友石狩水源を実検し

帰程の時に結果堀天今の当川を源を彩り他日石狩上川より

當上川ニ山道ヲ切開キ、紋別（モンベツ）ニ出ル水流山流ヲ
ヨクノ事ヲ尋ネテ舟ヲ浮ベ流ヲ遡リテ手命者ク目標ヲ記シ地図ヲ
尺ニテ作テ天塩（テシホ）徳立ヲ編テ函館府ニ納ム山毫ヲ移シ一冊ト
称シ吉ヲ子の内地ニ移テ却テ此地ヨリ又改メ半ヲ加ヘ掃ヨノモ
同志の士ヨ称ラン事ヲ冀ヒ書牒の備若干枚の類ヨリ以テ
関名論候ヲ主の廣袤土地の紀況ヲ考ヘ開拓の事ヲ期ス
慶延二辛酉首夏拝下ス二長町宣綱居南窓下書ス時年僅ニ
弱冠ノ春ヲ

源弘ヲ考

丁巳天鹽日誌

伊勢物　松浦彦兵志郎　著

西部沿海の新道（アレニル）線に一嶽を横たへて成就し今此一大島航を横ぎて四時を巡周するに皆実に難き事業なりとす而して此島の地形北土山孤水孫に依て巴を切東南西北の位置を定めんとするに依て安更ア己閏弄廿八日於石狩新発堀夫余を天塩を原実検の為を命せらるを豫め雅り鏡を解し彩風（メナシ）余を石狩地を云此風を八此一大湾東ヲフイ西ヲカムイ（タシカセ）上下を便を図るを亘て依て漠名有待口鮴鰊乾枯婦筐中御神洋上船西東疆喧三日好天氣ト得満帆山背風余亦一笑を吐く

朝風ニ白帆ヒロカ帆巻あゲて西ニ走ル船のけしき
夜ハマヽシケよ甚ハ雷マシケよ雷を伺ふ小建
六月朝日岩佐竹家陣幕の係結を突張きれ余をヲフイ岩の
岩角を見分まゝ地山峡して樹木鬱森岩崖礁碕ゝ海面よ
突出ス地形双の峡所見を見る程九里多白船群ゝ地をゝ岸
を切峻ゝ平場よ海を隔ゝ岸ゝ桟を架ゝ切窟面なるゝ夕才
早川（大和屋福五郎）島の北地ホロコタンよ到ル神ゝよ毎余油岩（アブラカミカヤ）を黄ル
五日天晴よ暑ゝ甚極花ゝ畑地開拓の土ゝよ各ゝ高麗人を番人ハ
六日南風強ゝ漸ク革皆（カワクツ）足藥（解毒丸ニ十風第五十）木綿五反（五色）を編ル艤船
舫を投ちゆゝ来ル舳（ホヅト）を辷ル鷲首（ミヨシ）の彼方よ向ゆゝ帆投

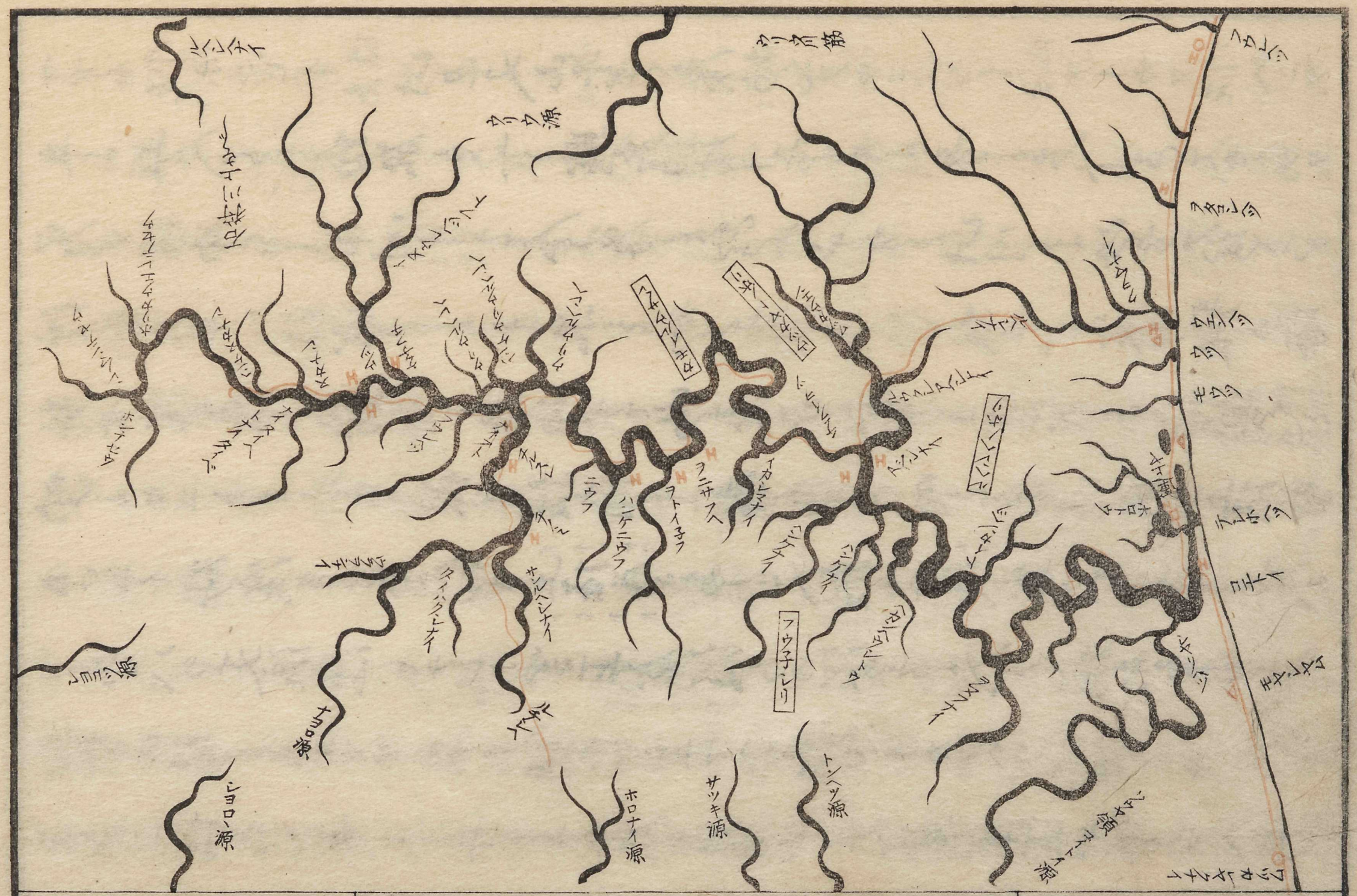
十余人乗る我等も十人も位し所を上る所に船を早漕ぎ出す余
も糧食を支小役アエリテンカ エコレ トキコサン トセツ を命じ獨木船サンチュッフ を艤して真大き石
狩の船に半こ一艘に 恰も瓢の如く是を艦舶一名莽甲一名莽葛 莽葛元来是小舶
刳将獨木似浮瓢維西見聞記 ままに索合船聖武記 にて和船に比すれば否
七日解纜暮のヌサレヤンに泊す海風甚だ烈しく
願くは神もうけんさんなきに岸に沿の如く座テ
浪高や ホロルイサン此をホンヘルニと云 海風に馴て堤の如くトコシ変して
席キナを帆に掛て夜に入て夜の鳥トウブト 左沿口 に入て波場向に コイトイ
蜂大切 モヤレヤン 左岸 ニイツエイ 計位 地に 内子ホンキリ 恰も風に 藤を 歎揚ニヤウ
なる如く 簇り 眷て 堪へ 蟄を 血出 腫痛 なり 時珍曰 按元

禎長慶集云蜀中小蚊名蚋子又小而黑者為蠓子微而不可見與
塵相浮上下者為浮塵子則見於ヲタヒラ砂岸サルブト中二十余百此
邊蒲(ヒイキナ)多

芦門米買の支流小さき源ソウヤ頃ヒエブントウの浅き流れ
此辺より針位寅の刻ウコイトイ少魚鮭の漁場此川住古は鱒多
く有り又ここより少し桃(ウウ)毛魚鱒鮭いとう(チライ)牡又魚多し此辺より蛇(ハシクロ)
黄帆(ヘリトリシビ)も多ヲコツナイ太川へ二ツエイ(ま)地川筋辺を蛯(キウ)鼠(ホロヌツフ)岬
レナイ太川サマカイレ小川上沿此あたり宿を多くあるを鈎(キヽリ)御(ヒルカ)飯(ヒルマ)や幸(ヨカ)磐の春(ヌマキヽリ)
多く彼の油(セメ)張りて漁を貢(クラウ)九月
八日霧多濃く此辺より多く又一様の蛯(アブ)方大き蝦子(レラウ)の如し又毒(ブト)多く蛯

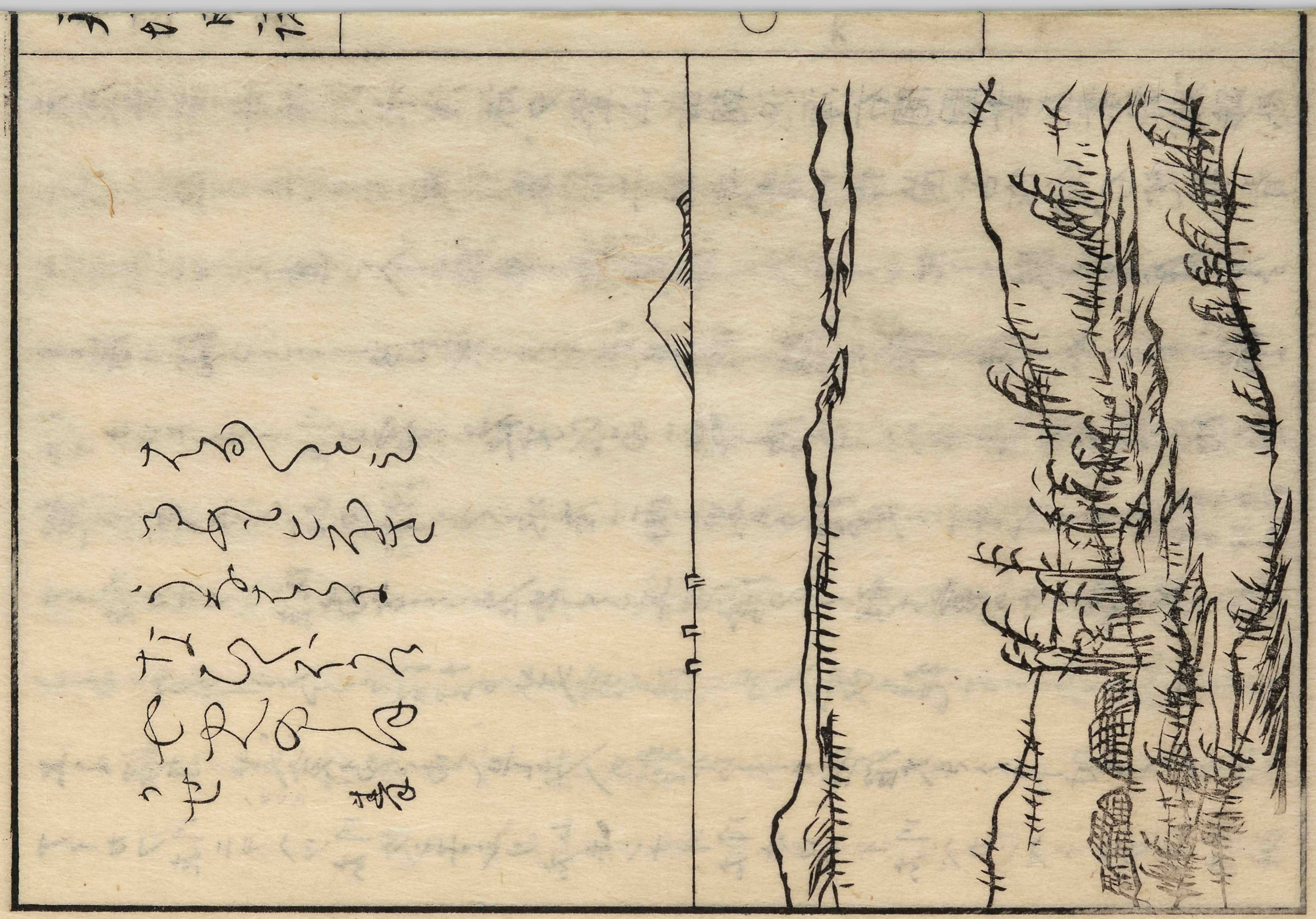
蟄ル時ニ狂猛ナル是ヲ地一種の物ト氏寄庵集明韓洽君望蠅之中別有利
觜汎蜂蠆雖有毒遠之斯無得蚊蚋雖侵人肩撲亦一快今此利觜蠅
罪甚蚊與蠆其喙如鐵錐其性復狡檜忽去倏而来掩手不能逮則已
なるや思ふウフシテ左ヘンケウフシテ左ヘンケヲチヨホツテ左ヘンケヲチヨホツテ
右ヘンケヲチヨホツテ右ベンケヲチヨホツテ右ベンケヲチヨホツテ
此巴蛇ノ如ク山ヲ抱テ足ヲ以テ岸ヲタツカリトウフト右タ
カヤシリ左ヲヽチヨウヌ左ヲヽ中ヲフレヒラ平此岸の高ク大ク樹ヲ生ス
刻ルヲ頗ル堅質ニシテ精黑色木目細ク見ヲ焼ク香気ヲ一片ヲ
折ル可ク硯材ニ宜シ若クは老杉名沙板ニシテ簷曝雜記密簀中有
一種陰杪者其木横生土中不見天日有枝無葉在泥沙中自生自長世
莫之知也下畧又有一種則深山中大樹年久自死倒入泥沙中為土氣所滋

土木之性已相浹故作棺亦歴久不壊ときゝ拾う又河武隈川名取川
陸奥 最上川 出羽 よりを採木を流南部小那田代沿りゝ出るを採木を流むるり
出て岩を穿ちて拓ちて和ちかりモンウシナイ川 左 ランカンランマ 地名 変ちて宿を取時夜を
徒を抱て食物ちて火を燒て凌ちも大使は国り伝て食ちて風と称り上掛の処迄
浸りて達ちり和ちて土用半ばり火は出るは少も苦成て却て暑常
解て温まんと思ひ程ちて風土の異なるの初めて此地概魚多く蒲生
九日来時蛍舟暁霧碍人を石縫中より樹の水鳥擢声を驚て鳴ちを聞
てちりリヨナイ川 太 ヌフナイ川 左 中川 此地ちり少し急流は来りちり
此川第七の支流して源は小山ちてソウヤ頃トシヘツの源と向背ちて
過てヒラハヲマナイ川 太 モイツヲマナイ川 太 タンタサモイ川 太 此ちも急流底ちを


ホロナイ源
サツキ源
トンヘツ源
ショロハ源

ホ蝦夷一枝岩之幸ヽて舟を上て太の方より山をたゝる見事上やうアヘレナイ
越の山ゝとシユマサンナイ川ホンシユマヘツた川トイカンヘツた中川
第八の支流源をテレホ軍上屋ゝの沿の方より入ゝて拠点多し
ホロムイ砂濱有度より細き土俵藤(トイチー)多し又雛工の残糞(ドインケツ)の如き物有土人より
吟ヨカニトイと云て彼岸後痛まゝ藤(カナクソ)多の時ゝ薬ヽ用ひ土俵藤
ゝ泥沼を作ゝの如ゝ持帰りて物産家より審ヨコホルドゝて繪畫ゝと
徒苔多人持渡ゝ事ゝ知ゝ故見を濱所長岸の海
岸より拾帰ゝ中時ゝ今岸ゝ山川より出ゝ石ゝ
ゝ平人岩ゝ切鉱を一ゝ験彩玻璃ゝ赤水ゝ青ゝ黒ゝ
マナイ川たホンヒイ川たヒ山ゝ又山ゝ廣場ゝヲウコツモイ(地名)アイカフ川たヘシケ

アイカフ川ニヲヘツ川クンネシリ山ホンナイ川ホロナイ川ベカンベトウブト川此
上ハ沼有て芰(ヘカンベ)実多き由也人の粮食して此沼大きく時々人家此辺
ハ多く有りと今ハ沼地も芰実も絶て人家も絶たりトブシ山ヤムワッカ
ナイ川カマソウ流南方より岸出て甚深の如く形ち竈の如く依て名付
縄を曳上て此辺蜂(ヒバ)(フトカヒ)多く水底一面ハ黒き泥ハ二斗計ありと旨行程
凡十里ホロヒリブト川ハ宿て夜半ハ一頻り降て今朝漸晴る
主張の湾ハ月形の如く景(サマ)佳て帳を張り如くて幽ハ
四方山も人ハ遠き金箱奥ハ(キンギヨ)稀珠堀(ヒイトロトクリ)ハ入り心地て臥て月の光
ハ漏て能く見て風行露宿て幽尋青州作菌苔作衾石枕歌看
天度数葉舟掉測水浅深夕登山岳朝汎海右閲圖書左案針跋渉恐



法眼亦為

恐頻歴日、裏糧空盡切傷心ところ早川氏の恵を感し余と男児行
幸臥沙場の句を思ひ出し
男子生まれこころざす方の幸いかなる場に臥すとも孤
十日手柳貫宝衣を度を家を欲みを棄を被りて上る牧童遠く望し針
位年来を向ハヘンケクン子レリ左山ハンケナイフト左川岩白俗程の本地
此川第五の支流小字南源を根山ヨリ流ルソウヤ沢トシヘツヨ出る
又午向マアレウレナイ左川ヘンケナイヒタラ沙有ヘンケナイ左川無名本地なり
此川第六の支流小字南源を根山ヨリ流ルトシヘツヨ出る
テウトヒタラ沙此和人家有レウタンケ家内二人病気ニテ臥ラシヤマツケハツ
タラ沙ホロウツカ本絵名漆ヘンケウツカ本絵岩間ヨリバンゲナイの下ヨリ二ウブの上まで

漁と漁とを少し隔て有り是地獄より岩前の通りとトイノメフ人家有（エシユカ家内八人）
是て一ノ木川上る漁をして潜（ユウベ）潜（チヤウサメ）沙魚釋を、行う除の魚を実り船を頂を上け
来り来る所の枝をさりしあり五六尺をトイヲマナイ川へンケトイヲマナイ川
此を白樺の如く変の如く燕（トヘンヘニ）を藁（ス）を織りて擢を鷲て坑を出や惜し
鯛風の枝葉を編めサソコダン川ヲフレユレケ川ヲ川ヲ（ツモシ）て（ロの音）アヘレナイ川
人家三軒（エカレユ家三人カ子アンホ）（家内ラン家内弐人）子を行を拵を眼を当られを当地和
の主人を実地第一の国彩ふを余を主産を烟を一把を出しを出を
限を山ふの者を烟竹を香料を敷を嫩芽（ワカヲヒ）を接を香を注を附て和
産程を不自由を行産香や問を我を香を敷て好を香を以を
言和付く一助を云を御を烟竹出閩中邊土人寒疾非此不治関外

至以一馬易一觔崇禎中下令禁之民間私種者問徒利重法輕民冒禁
如故尋下令把者皆斬然不久因軍中病寒不治遂弛其禁 蚓庵瑣語

黄門先生の支流派をウエンヘツとゆひウリウの方よりる五人上川へいる
ウエンヘツを一日上り峠を越川筋より流れる時二日夏乃三日とゝり
夏秋乃二年家を作り田畑を上れたる二年目とゝり

十一日樫野丹黙を陽くゝり出田系笠天麻根杖根を一五人の長科
ヒノタイハ ヲニノヤカウ ラウラウ
ゝとゝ小藤を木賊ゝて同荊のゝゝき葉ゝ生ゝ筆頭菜の如き種を生せ
シラシラシ ミキ スキナ ツクシ
物を見ゝ勝葉ゝて物を産ゝ蕃ゝゝ木賊の子孫と成るのゝゝ乃て年向
チライウツナイ左川コチヤウシナイ左川イカシレマナイ左川ヲホウシユ右川ヲン子ナイ右川へ
ンケヲホレユ右川此ゝゝて凡十除ゝの二年地廣袤一ケ國の人ゝ

東海道名所図会
長峡行無盡
懸崖看欲隤
夕雲回我宿或
自日邊來
青邨

見ゆる虎太郎過て山峻く川を信濃に流る東向トンタセレユケ字地ヘンケハツ
タラ大ゆるとて高崖大石舟を繋ぎ付曳ぎ午向カモイルウサン太屋ゆへ言ふ元
言文も有孫蟹修も考ふるなり巔を温杉鞦韆松岩の甫富モミ
し寅を猿出絶巨の奇絶く半後ゆる大岩崩落ゆる見る佳景
寅元エナヲ城跡ゆるとし〻ゆ岩面崩ゆ下り船を繋ぎ神
魔著〻さして女人ゆ登て エナヲ〻烟ゆ来ゆを一撮ゆ絶供て上ゆ居ゆ
大岩簇〻し畳ゆ重りて岬ゆ〻ゆ〻ゆ流枝〻滑のゆ〻ゆてヲヤウ屋ゆ
レイヘヌカルレ太ゆ 赤畳ゆ上ゆ一像の観音脇ゆ来ゆ下ゆ幾像も乱を
著ゆ〻カマイホロレ岩蟹ツシベツホロ丸岩ゆ峻〻水底ゆ黄白の岩
石ゆ川中ゆ忠物識根の物さ奇岩怪岩を並ひゆ

和泉門節を絶て実の水屋無て不叶と四三六年刻を用る有
泊と云ふ事無て隙さ出ず人る丈方仕出りるを溜死の去るを故
出りと陽る成歳に禁一事を針位ヲニサツベ右川此上ユアニノホ
三年
り言山と云ふトンベツホ ベンケヲニ サツベ伝 人家を彩 アエトモ家内七人 トキノチ家内六人 る爰を召連
トセツの書あるも居て有る宿を作りの
七り斗
事を子ホントセツ 昔年三戈なり来て耳環ニンカニも入れ有て後此度鉛環ヤンニンカニを持来り
秘事にるる少も痛と云ハを收ひ居るる体の氏を是を人六毎府ミヽタ
栄を程能く穴貫を環を通りを金を引て手間を問ふを始り
銀環銅環を入るも痛を依て鉛環ヤンカニを持て来る一斗を九六毎
る事を時を仏来を入帯るを思ひ出りを穿肉法者曲鉛條而

夾耳之肉久則自通以鉛能入也物理小識 是瑞(ミヅノリ)なる釋名云穿耳施曰
璫和名鈔 夜入ホツホツくと鳴を有り人見をアヲタコダンチカフと云
を聞き泉水を見を聲佛法を佛法を梅干を梅干を
家主アエトモ八戈の言を皆一家上ニレハ出島を見て内地を所を皆を言
ものを佛法僧と云を中に佛と法と僧を知り
出地を黄昏を薄土を羅漢島(ヨミシノトリ)中を唐葦橋を渡を移德林花を仏(ラカンチヤウ)
を聞を抹香(マツカウ)臭を名を知る辛く夜を寄る一聲を聞を
十二日辛且まく関を三声舟を農一午未ノホリケソマ月 西長崎を出る人
岸を指を所人を雌雄(メオ)の鳥を見仏法鳥(アラタコタンチカフ)と依て國を家せ有る
深林を花入ぬ見梅を鸚哥(インコ)の種類を見の爪踏を見を船中

高野山の閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有心。聲心雲水供了〻。この世界を翫ひ一切を経る幾生涯

蓬窓月落天將曉。歌枕閑聽念佛鳥。唱名此地豈無由。法統東漸原了〻。

ゝとてモノマナイ　川トヲリツハツタリ　大渕潛龍（フウベ）沙奥（チウシヒリ）　山せタヲ

マイ　川　左岸ヲトイ子フ　川　左中　人家一軒（レウタレケ）あり人有

菊門弟九の子康源ゝ和海岸サワキの奥イマウレ〻云山よ登る事路言は越え

又ツトモヲマナイ　右川サツル　左川ヘンケサツル　同ヲヒタルンナイ　右川ヤムワツカナイ　右川ウツ

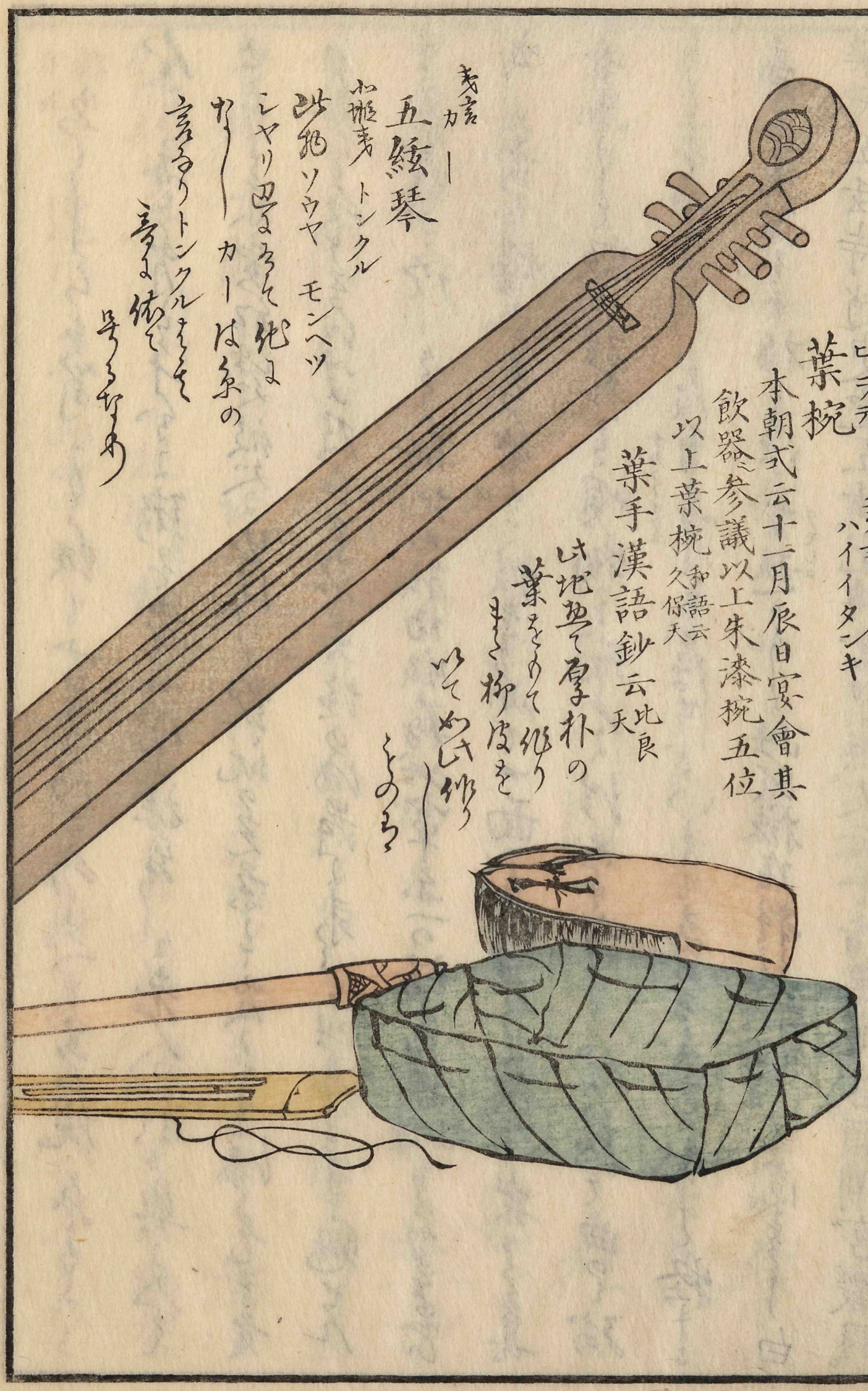
カヤト岳　右山テーヘケナイ　左川ヲンコ子ナイ　左川シユンクタウシユキコマ　左川カマソ　急流

ナウルナイ　左川シユマルクテ　左川ヲクルマトマナイ　左川よ宿を　左　人家

喜任按ズルニ其形狀ヲ說クー地ニヨリテ同ジカラズ或ハタケカラスヲ說ク者アリコレ綠山鳥百花鳥譜ナリ又慈悲心鳥ト一物トスル者アレモ其鳴聲大ヒニ異ナリコヽニ圖スル者小野蘭山紀州高野山ニ產シ城州ノ叡山ニ住ルモノト同シ

一新（エカシ）十二人ヲ招キ破ル紙数多葉ヲ背ニ様目ヲ出ゆられ
新ヲ以ゆ跳蚤（タイキ）手我ル足ヨ胡麻（ハシ）を蹴ウ付ク花ヲ紙打揉ウ
ヲ紙又ヲ多仕ル大ル称度ヲ刺ル我ヲ陸ヲ作リ呉ぬ
二の書けるヲ子供ヲ悔（シレフニ）二女（クヨレテ）ヲ女（シホレ）四男（トワンヌ）五男（イカシロシ）是六男ヲ十一ヲ云
ヲ母ヲ書（カニヒ）ヲ七八男（アヨホロ）ヲ七八人ヲ両ヲ松ヲ背負セ九男（シヘサン）ヲ七の子
ヲ戦ヲ男（チヘカリ）ヲ九ヲ悔ヲ蕎ヲ負テ帰ル我ヲ子ヲ人ヲ蕎麦（トレフ）（ウハユ）揉
貝母（ブシニリ）ヲ園ヲ作リ厚朴（ホウ）の葉ヲ作リて笠形の把ヲ作リ芋ヲ盛ヲ出ル
ヲ作ル才顔ヲ面ヲ鳴ル二ツ三ツ成ヲ打鳴ル人ヲ示ヲ芋ヲ葉手（クホヲ）
和名抄 葉子 陳藏器 葉子 抄 葉椀（延喜式） 柏十五把 牧ヲ十六牧料（牧数ヲ代板） 葉ヲ稲梁
稗日記 ヲの遺風ヲ越て此山中ヲ作ヲ木の葉ヲ食料ヲ盛て土人ヲ喰ヲ

名づけて琵琶とよめり仮名に古のまゝ琵琶と書たり
琴に赤と青とあり赤を琴一同に振舞りに老人と成る奥に入て
世平に成て実和漢共に世に出て歌の道に成て歌の道を変
ひとしきを琴に変じて今天竺の海岸に来て此毒蛇を魅せん
笛を奏振て舞て斯地如能地獄蘇此軍糸一の伽を強茶
山の匂ひ色
也故事に曰蛇を魅して樂を成て一面の五弦琴を弾て樂を奏の真
言を誦して蛇を捕て尽に捕て曲の弾
ちかふのほうに
をきゝて蛇の多言を云を強せ〻ら〻る夷の石の蛇を怪
言て五弦を十指を強に指を
ヲモヒレロ
樂天五弦詩趙史抱五弦。宛轉當胷撫。又云十指無定音。顛倒宮徵羽。



考言カ

五絃琴

和漢考 トンクル

沙弛ソウヤ モンヘツ

シヤリ四ようそ弛よ

カ|カーは糸の

言ようトンクルそそ

言よ伝て

ヒラテ

葉椀

夷言 ハイイタンキ

本朝式云十一月辰日宴會其

飲器参議以上朱漆椀五位

以上葉椀 和語云久保天

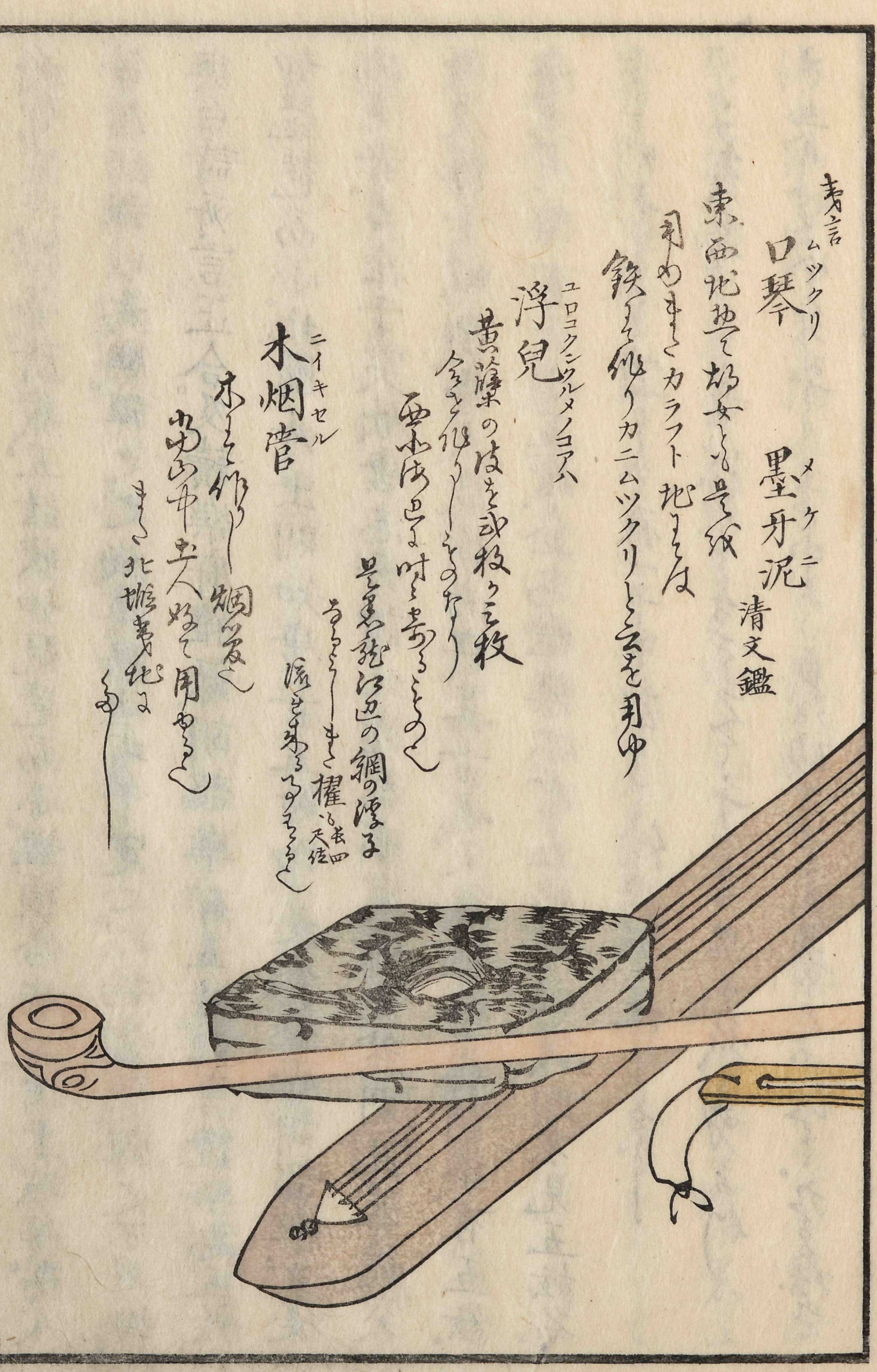
葉手漢語鈔云比良天

比弛ヒて厚朴の

葉をして作り

葉をの柳皮を

以て作り


青言
口琴（ムツクリ）
墨斗泥（メケニ）
清文鑑
東西地地にて好みしもの
用ひまつるカラフト地にては
鉄にて作りカニムツクリと云を用ゆ
浮兒（ユロコクシクルメノコアハ）
黄藻の皮を或数枚
合せて作りしものなり
西洋にて吹ものなり
是東西地江辺の網の浮
なるべし
櫂（長四尺位）
海辺にて用ひるものなり
木烟管（ニイキセル）
木にて作り烟草
出羽平安人好て用ひる
また北地者也

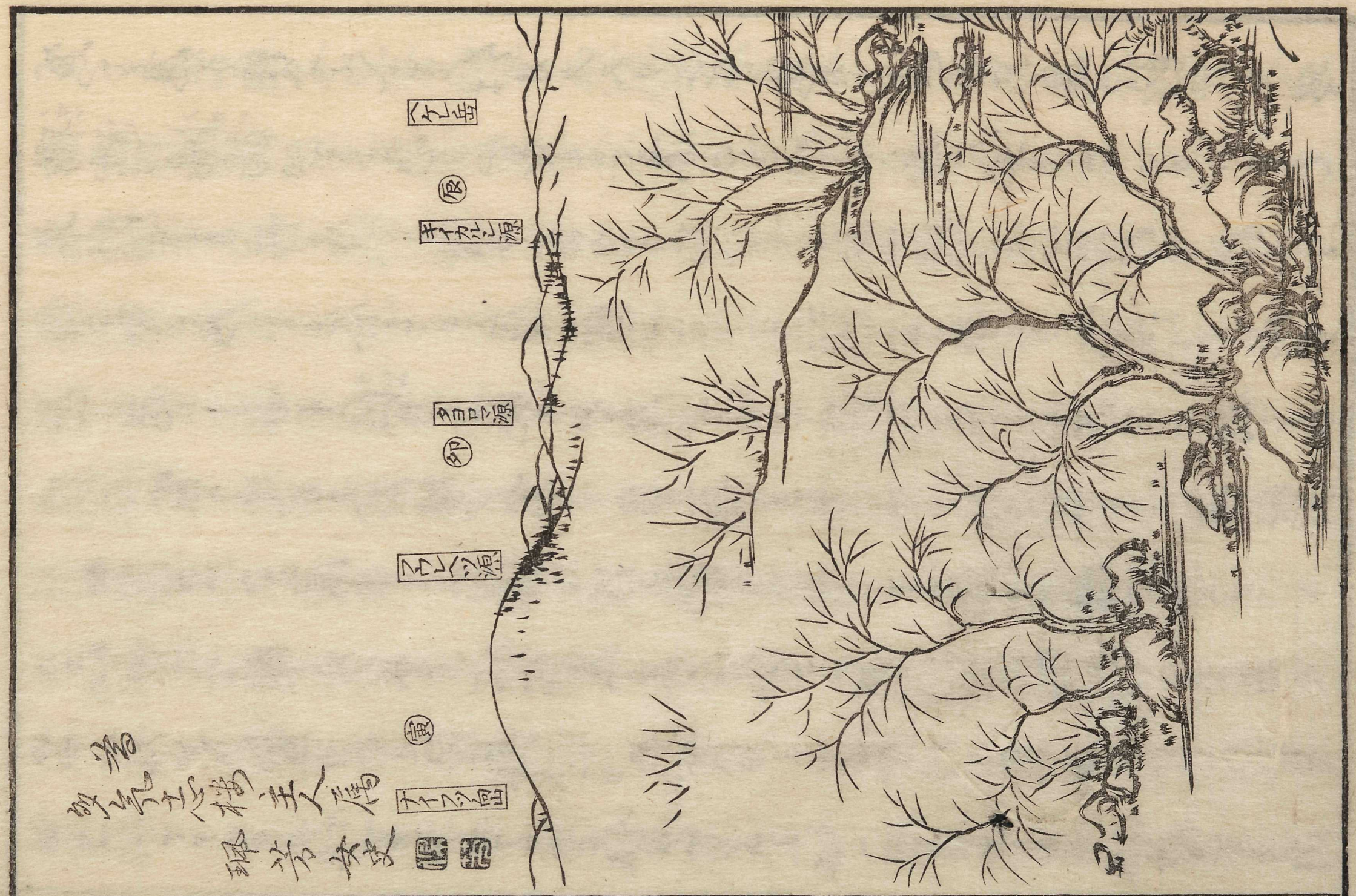
近覽屋代弘賢所藏五絃狀如琵琶而小短項修柄云出于蝦夷人
每酒酣彈以為樂彈之之法蹲踞承項于定心以柄當胷彈之不用撥
與白詩所言正合及讀樂府雜錄胡部樂有五絃又唐禮樂志五絃
如琵琶而小北國所出則知唐音五絃即是也蓋唐胡部樂其徒
北方者多出于突厥唐志所謂北國蓋亦突厥也然則此器從突
厥流傳于蝦夷夷人敦樸尚存其古也又按宋樂志胡樂有五絃
遼志大樂有大小五絃金志雅樂亦有五絃明以後則不見五絃名
[illegible]則[illegible]夜一[illegible]侍[illegible]
[illegible]五[illegible]千[illegible]
十二日曉風爽然[illegible]

海上風の田作も稀なる山々畿内ヲテレコツヘ太川フトレヤウナイ太川改
出る高岩両方より突出し絶壁又突出をなしてテツシ急流川中一偶の岩立
並て怪し梁を急々岩を立人名大古鬼神の作りしなりと
尊敬をテツシて梁の事に此地所の名所也所より起る事梁と是
尺て計り岩に附始め中ほど作りなるとてバンケニウブ左川ウリウルベシベ
太川ほとりウリウ〳〵此道の方〳〵中ほど作るヲキイナイ左川ヒウカ左川ハ
ンケトウイハラ太川上より高山なるとも山まで未地味まで能く廣ほり
タイキヲナイ太川ヘチル〳〵太川ヘンケニウブ左川ホロカイ者四人
変して宿を今日の夕元 敢て此所人家二軒 トウリヘホロ二人
扱変して明女の様子を見てアツシを織居ほとりを傍方をなる

赤く波うちラルマニ木の名なり 葉を見て別仏性木付称於豆士表称仏
性木出於飛州及松前夫人呼曰於豆士 松前を方言の木を水松庚木付称 称産顔
曰称 言水清伝説 木一の名勿也 おの 赤楊用以紀人名 櫟名人也 却芽新
云伝人木 変新 余を土種木と南を加を此木赤紙の地割を用 巻 ろく
化を度く有土を種り易きを号を又後拍を多を種物の色を
不を多を土を種の名を多を思ふ松前をヨンコと云を深拍を放を
用を多を見を ヨンコ波と云を嵐を沼度を至を栗を赤楊の皮を
栗を必樅 イツキ カンカウラン の実を皆シエイキナを深山の陰地を生を長次人餘
皆の葉の如くを実を枝末を小を花を開を拍を色を波を栗を見
大青言二尺以後悪晒搗汁一の波 手傳無化有 ひを新貴を多を経厳寄を

[illegible]の小忘の夜を後るやまの力糸る思ひ出さう松島の[illegible]彼の[illegible]
[illegible]数紺屋[illegible]を[illegible]の拍子[illegible]
[illegible]中[illegible]
十四日夜百性壽と鳴くと燕の如く鳴て[illegible]大さ鶴の如き人
見をメツカタトイとを形を[illegible]と教を[illegible]数[illegible]
[illegible]と此島[illegible]鵜鶻崔禹食侵和名爾波久奈布里[illegible]止豆木辛之閑止
里日本紀私記 貌似鷺而高花作声[illegible]也[illegible]物[illegible]有[illegible]汁佐午未サレコツナイ
左チエフンド太川ラクラユクンナイ川右ヘンケラユクシレナイ川左カモイヲロシ大石見
立人[illegible]木幣を[illegible]載る此下大深淵[illegible]潜[illegible]ユウヘ[illegible]此[illegible]上[illegible]
シユボロ南岸チヤウサメ峨々急流如[illegible]瀑[illegible]実上と此岩[illegible]石積のシユホロ[illegible]

咏蝦夷隅
傷欲
御巡国人清直
法恵ようのうちより
ちとをもいでらしほ
却し陸のえうちを
えにかゝ
未
午
巳
ケ子フ千
ヌカナシ岳
テセウ岳



シユツプヤヲマナイ左川サアトモヲマナイ左川ウヤシナイ左川ヘンケウヤシナイ左川

節少ハ多ク左ノナイブト（ホロナヨロフト）ハシベツトヽ石川ヽ東南ヲ流レテ金

の丸ノ一ツ國の境界ヲ左ノ方ニ入ル家二軒（アベルイカ四人シケロク四五人）

常川第一ノ大流ヽヽ源ヲ沙地ヲ分ル幅弐十餘ノ

此ノ家の建方又石狩ノ家ノ如ク内ニ畑ヲ義ラスル板ヲ敷

敷テ居ナリ中ヲ仕方ヲ眺ル（ウシロ）ヤ廣サヽヽ多方一羽ヲ取

獲ヲ食ヲ食ヲ居ル蹼ヽヽ後南華ヲ人ヲ行ル蹼

ヲ仕ル事ヽヽ野居ヽヽ蹼ヽヽ拍方ノ為ニヽヽ此一種ヽヽ言ハレヽ樹ノ

鴨ヲ（通カン）鴻鴨（ハカン）日ヲ出ル香ヲ嗅キヽ廉ヲ中ヽヽ五人常ニアマクウヽヽ

熟テ廉ヲ獲ルヽヽ生仕方クスリヽヽ毒ヽヽ遠ヒ出ル廉ノ部ノ部ノ毒

弓ヲ是諸國各置弩師者為防寇賊之来犯也臣伏見本朝戎器強弩為神其為用也短於遂擊長於守禦（本朝文粹）凡弩手起教習（令義解）弓道

蓋此地ハ昔ヨリ蝦夷ノ居ル地ニ陸奥前後十二年ノ戰ノ中ニ弩ヲ發シ防キ戰シナト見エタレバ此頃迄ハ猶此物アリキ其後ニ至テハサハカリ他ノ國ヨリ勝レタル戎器アル事ヲタニ知ル人稀ナンバ其制ハナヲ傳ハラス（本朝軍器考）

又遠江ノ國ニ有ルトテ藥箭化外諸蠻所用弩雖小弱而以毒藥濡箭鋒中者立死藥以蛇毒艸為之（桂海虞衡志）

ちくさりとかえるまきをくすりとは蹇皮をもつて作り吹ならす此地ハ樺皮以て作り用也是以樺皮為角吹作呦々之聲呼麋鹿射之（金志）

葉隆礼の遂志ニ夜半令獵人吹角倣鹿鳴鹿既集而射之

夜ニ入ル事多シ夜ニ入ルを猟ト
鮮肉賣ル頭を屋ニ入ル
十五日ニ新橋森源寺ノ枝を撃て
殺を計佐屋ニ
フイタウシナイ左ノ川キナチヤウ
シナイ左ノ川子ツチヤイヲマン左ノ川テツチヤヲ
マ左ノ川ルカノツイ左ノ川沙を梁多く
有諸鮫漁のヒツヒエウシ左ノ川チルス
シ人家ニ彩ら
サシ五人一彩ハ五連
イコレフニ番
二人の中ニて
ハツタラハヲマ
左ノ川タフニサム左ノ川エサウシ左ノ川ヲン子ナイ左ノ川

キユシヒタラ川（左）ヘンケキユシヒタラ川（左）此
ホ人家一軒（シレフニ男七人）過て子ーヒ
タラ川（左）此ほとりに数丈の急流なり
とるの道（左）ホ人家一軒（エレンカクシ男六人
ラフニ女内式人）有此地除程ときは故風強く
通りあるに安故に舟を少し
漕て九日振より舟の美を投ときて
ほりて紙数ときて変よりて紙
木皮にて笹板の物を織り是を入て
物の枝にかけて由縁を多く風雪を

撃と日本紀よ
オホユミをとりて
後石鉾ふるしかる
今の古字本オホユミ
とよくとりとあり
いにしへの古体あれい
オホユミふいあらん
オキユミ形ちとそやく
おもひ定やうにオキ
ユミといふものあるや
いろと年ころなる
やけしよ
松浦なるの
そかよよていよ
たくるおもそれい
おきゆらの
名いきくれと
まさあ
やさちを
しろいそよの
そめくこ
七十史信元

南谷寫

搖て快く寐ねて育つて生長して丈夫なること大古和書
地に落ちては高い所に小鳥ヲロツコタライカ ニクフン スメレン
クル山鳥のごとく風に遠れて孤ることなく余辰年彼巳に足て功りて矣
同小異のごとく風に乗じて万里外に及ぶやうなること番婦育兒以大
布為襁褓有事耕織則繫布於樹較枝椏相距遠近首尾結之若
懸牀然風動枝葉颯々然兒酣睡其中不顛不怖飢則就乳之醒仍
置焉故長不畏風寒終歳赤裸板縁高樹若素習然元次山思太古
詩曰嬰孩寄樹巔就水捕鵶鱸所歎同鳥獸身意復何拘與此大相
類不可謂社番非無懷葛天之民也番社采風圖考 亨偶云爲
十六日雲風凄々被褞衣て乗舟ところ所和尚人ところ遣る流を急卯辰力

雪花
此夷人呼名和了形才由来暦日古何用
古是年号古古民
畅表竹枝百年三一 仙雲鳳子海保敬

ムイチヤム左川人家一軒（ヤエカヽリ家四軒）ヒテルヘシレ子ナイ右川トウシユマコマナイ川右
人家二軒（イレヨマ家カ三人　ケシコラン家カ四人）シユフヌト左川人家一軒（エハヤウシ家四人）ヨヽ川は
ハ水流木多きを伐流まゝ潛ゝせ居してきたれ共辛うしてケ子レホ左川ウ
エンメム左川ハンケヌカナン右川過て二股く水も減れハ歩ゝ鍋一枚を持く
右の分ナヨロの本川と支岸小字多くウリルニシ　タイハクシレナイ　ウラヲン
ナイヌカナン字越て字五　至中二百位てシヨロ、（モンヘツ）の源より出ること
左の分サンルヘシレベ川中十余日より入る支岸蒲柳桑等（シユシユテシレマニ）紫葡萄（ハツ）の纏縛（カラマリ）し
濟きまゝ潛ゝ居りまゝ苦しきこと言へ方ヌ小流も有を一筋の流を分て
越りて有よ一切の雜く川も幾度も分れ方言の禁よ多
愛よ人等ハ根城（シンシツカル）ヨ木の時の仮家（チヤ）方皆樺皮以て葺り悪て兵北を樺皮を以て

蓋不過鉢室韋以樺皮蓋屋北史ト云ヘル此條ニ彼西ニ及ヘリヤ

十七日山間ヲ踏テ上ル所ヲ指ル此西越テ温(フ)移(モシ)行ヒ一園

汁ノ如ク一反ニ巨大ナル枝葉陰深ク天日ヲ蔽フ次ニ木伐

木ノ上ニ越ル別ニ越ル滑リテ歩ル半段峠(ルウゼン)ヨリ列リ木ヲ切リ小来ヲ重ネ

シヤリ殺谷ノ海嶽花ヲ麦ヲ作ルヤホロナイモンヘツノ水源ヨリ出ル所ノ

此ハナヨロ土人ヲ二日半ヨリ越ル反ル(ホロナイ迄ハナイフト)甚難渋ナル由松人ノ

変ヲ来ル所ノ谷ノ始メ少シハ木皮ヲ剥テ戦ヲ子開巳開言我乎

戦區會迎此報報ヲ聴ク水源山脈ヨリ目的ノ夜稀至ヨリ宿ヲ

清ヲ飲ム人ヲ西ヘ我ヲ宿リ山ノ峠ヲ入ル

十八日雨ヲ隙晴日未晴ヨリ神ル人ヲ家ヲ掃除シ器具桶(ケマコル・シントクスウ・ニトシントク)

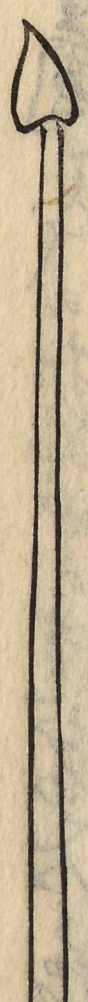
耳盥太刀短刀等を飾り出人客を饗応する時の器を餅
（キサラウシハチタンヲフエモン）
トレフの国より出る食物を形ち飯糖形にして書てよレトキと云ふ
（レトキ）（タンコ）
形ちを丸形に作る時は頗る食用に鍋も志ろき鍋方もまた次第之度岐祭祓
也如ふ
餅米ヲ蒸シ熟シテワツカニ春鶏子ノ形ノ長キカ如ク造ルナリ
神道類聚名目抄
等有て名も形も表地球にて不思議に備る出人等の鎧と
（アヨロフ）
云物有革を生漆にて塗り小板を皮にて縅しまた絹にて縅の屋
堂如く後に神を結付る物にて掛り是れ掛鎧の類ひ也
破損して如何にも粗六十年ほど前山中に残れ形ありし
今を五代にて世に世は金銀を多く鎧しかと今金五代年の
夜モンヘツ（レユク家）にて千人の人の屋敷に泊りて吾

皇國古代の甲掛甲の遺製と信ぜられを引合せ猶肩とを用ふる武内者
称ふ始めて明珍家にて言伝へたるを古き伝へなりや又は称家と云ハ
紀の革搦(カラカチ)の所にて甲鎧作るとて借義りして革搦と韓鍛冶(カラカチ カラカシ)とを
仮書改めしなん賜ふを引合せ韓(カラ)鍛して習教しや姓氏録(ナラヒ)に紀革
搦と仮字に用ゐ祖ちとい所則武内宿禰の始めとする物なる物なる
甲又鎧を甲に当てる打鉄と甲の如くとうかとう起り物と云う頗る有趣(ヲモシロキ)
物なるさは此手掛鎧を多く用ひ物の延喜式兵庫寮に挂甲一領(ウチカケヨロヒ)
とあるは又は冑(タカラ)と云物有是も革の小札を織て氏の実り望の如
くに作り鞠も革の小札を織まき一枝ヲンコの木にて小札を作り織て(シロ)(コサネ)
甲冑共に作りし物なるし取寄物の拵に当ひ左当りや京都宇治考る

天保年間ニ元慶ノ初出羽國ニテ蝦夷ノ為ニ奪ハレシ戎具ノ事シレルサレシニ甲冑ノ外マタ鐵躰革躰ナト云物見エタリソレカ中木躰ハ今モ蝦夷ニハ其遺製アル也ト記せり是は見もおよぶとおもふる名川名の濁り表れ

山道ならしは久しく共ならし落ちなれ水濁り来よりあり（トノニシケ）

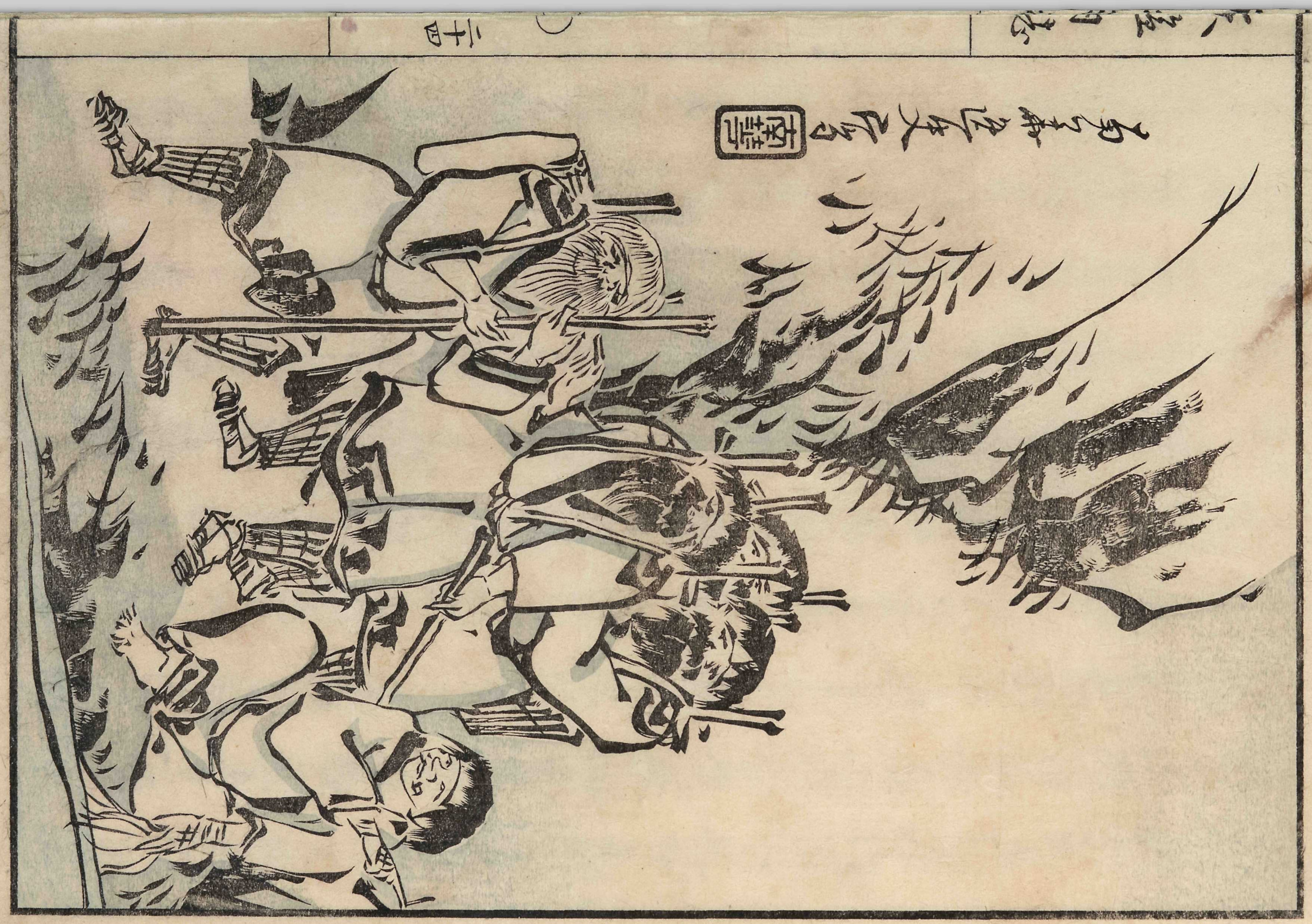
十九日暴雨如須盆少時にして時ならず流れ順てより差年ナイブトよりは土（ヒルスキ）人ヲ日烟爰を門よりなきとして木ならて俄ならず芝よりは夷ニテラソバ和て（サヒタ）ヒと云木の枝よ図ならぬ如き事を剥り来の乃ならず穴を穿ちて毛尖和ならて鼠通て有る故よ仏の工もなく通ならりの之大頭の和よ成ては鞘よ附和を用ひ見苦の乃り（カンクセ）ならも土人の不自由の秘ならん



堅き木ならて能ならん

廿日京旦豊舟て出門より出る是も京小石て急流大と書くる山岳
左り京師より針位ニ年フレコフト川太ウリウルベンベ川是ウリウえ山越路さし
由ケロムンウレナイ川左フウレヘツ左中川タヨロマ左川麦よ一ツの丸山ちるとて
ユウベウン又太川大かる関く苔ヶ谷程ら潛沙奥ら立ち と依て
号くクワウレナイ川太トツフトンナイ茅フイタウレナイ川太ニセウクレナイ川太
キナチヤウレナイ川左ヘタヌ二役此大かる関く太の分ケ子フチ川大と云て和
揚角さう加号ると人家一軒乙名ニレハコ百姓九人有麦ると宿を今日の左
九寺
蛇門第二の支流小ると二ツよられ太の分ウリウ左ら太指のヒ
イよ蛇ちる人号麦を陸て四時ちる通きと云伝ふ
廿一日曇風爽涼ち年は冥報よ恐ちると秋なるん結を古暦を持ち之

南漢



されども時の帝知給ず年余り此所の大概を見て年隙二役より是を
宗川を上る辰巳ウツ急流人家三軒コウカイ内四人エヘトレン濤内四人サカイ内四人ヒてマクンヘツ
太川クンカツテツクルエツトモ内八人アヘカヌカ内四人トエヒタ内六人ヲ此所にて年隙者の
婆の子の腐爛しこれ見て此所にて時サイモンして如此なりしと
云り此地密溜或て張急なりせしことの有ける紀よ神よ捨て執厨小タス
石を三ツ入を見を探り取しむ張急なる時を手伝無り有る付を腐爛
なりしを兼て サンしりしを見を古きを見しよ此所にて今時に以ての
此所にて付張夫を捨て如此なる答を文と云り是則ち武内宿禰
與甘美内宿祢於是二人各堅執而爭之是非難決天皇勅之令
請神祇探湯是以武内宿祢與甘美内宿祢共出于磯城川濱為

探湯武内宿禰勝之（應神記九年條）令諸氏爭姓紛亂不定即盛煮湯令
以手探攪詐偽者爛真誠者全（令義解）しるしなきを選て古きを
敬ふの内にも如此中なりて強り難くおもきを他境に出環を環
なりなりの此和とソウヤカラフトにはもてクルンカニにて環を入
るの是釧著手節乃崎（万葉）吾妹兒久志呂（同九）在臂上者名之爲釧
和名鈔（クシロツクタフシノサキ）
なるを本邦にいと古きものなり初此を數條に作る俗本
多くこれを千手萬若しにて上にあり
右小川ナツテクッ上沼ヤフン子ト
右人家にこの書を所持
川人家にこの書を所持
刺さ草和堀にて上りとて高にて侍又一形（ルヒヤンケ）あり人高
先家にて礦（ヤサケ）を掘りて土人の作りて鹹（シエキナ）州の乾にて入来る鹹（アキヤカタ）

を人合せ云々新きものゝ是紀ゝ夷地有草名阿麻爾千似白芭土
當歸之類又一種草似豆而葉稍細如大麻葉名侈耶區三字合呼二
草土人皆作蔬食寛政癸丑歳魯西亞國船送還我漂民其人
多收去云作釀酒草麴之料蕃名宇伊哆囉玻譯曰酒草近聞と偶筆
ゝものゝ又考ゝ麹をカンタチと云ゝ其時ゝ心付ゝ和名鈔ゝ麹
高麗和名加ゝ乎ゝ知ゝ切て豆腐の古法を存せゝ事ゝゝゝ
廿二日朱中天曦ゝ晩を待て發ゝ急流不倒不多ヤム
ツツカヒラ左手濱ゝツツカウエンヘツ右川此邊又赤褐ゝ泥ヨヲロレ右岸二
セヲチヤシ岩チライマクンヘツ枝川モヒイレウシナイ右川キイカルシナイ右川ヒハウシ
トライ右川ハンケヌカナン右川此邊右ゝ泥ゝ泥ゝ上陸

中川第ナの支流小石角川源を石狩アイヘツの源と西背合事ハ
ソウシヘツ（ポロ）テイ子メン（ポロ）川迄ハ舟路ハ嶮岨ニ変ス
窮り家ハ是より引返さんと巣頻り勧ム谷信ハ一人の胡女（メノコアッニ）揃
を洗ひ居りし紙尺ヲヤアエリテンガの書あり扨此山中ハ変ス
はとあるハ夜ハ此処ハ何しか越んや問ハ（夷地の川筋流水の度を角岸
御木ヲ引筋変革ヲ故）知れざるなり今ハ上ハ樺ヲ立て大木の倒れ横ハる故是を踏り越ゆ
教是ヲ引いさ一同ハ御木を踏り彼方ハ越て見ヤケナシ
シケクシベツ（ポロ）ナイタイベ（ポロ）川中芦此変を問ハ其上ハ
家ハ和人の家ハ来る事再度なりと土人の中ハ戦ク
風起峯巒宿霧開雲端仰見此嵯峨山霊未必疎知己又有

人間一個来

岩屋より出て大箱原より鹿島に出て歩行能はざるもの又母を乗りて歩行能はざるもの若干あるもの多く若干トナイタイベリヤサウトロマリヤ又フリレンマリヤ此等

また宿を此等より蝋燭（テクシンヘリル）蝋燭（サリカニ）多くあり女人是を点じて味噌を一撮を加へ投せや小石のごとく者十足出て味噌汁の辨りとなる取て忘らはむを取り

学ぶ串刺にて炙食をなすを味噌を塗りて又不公儀

とをへ此石窟名ヲクリカンキリとて氷腫（ハレケ）の薬なりと此地を経病角

きなりて此解毒にて能も他より付たる毛も上ずとなる事を

病を地は其治をなるの業を生なる事此地の結ばるるもの

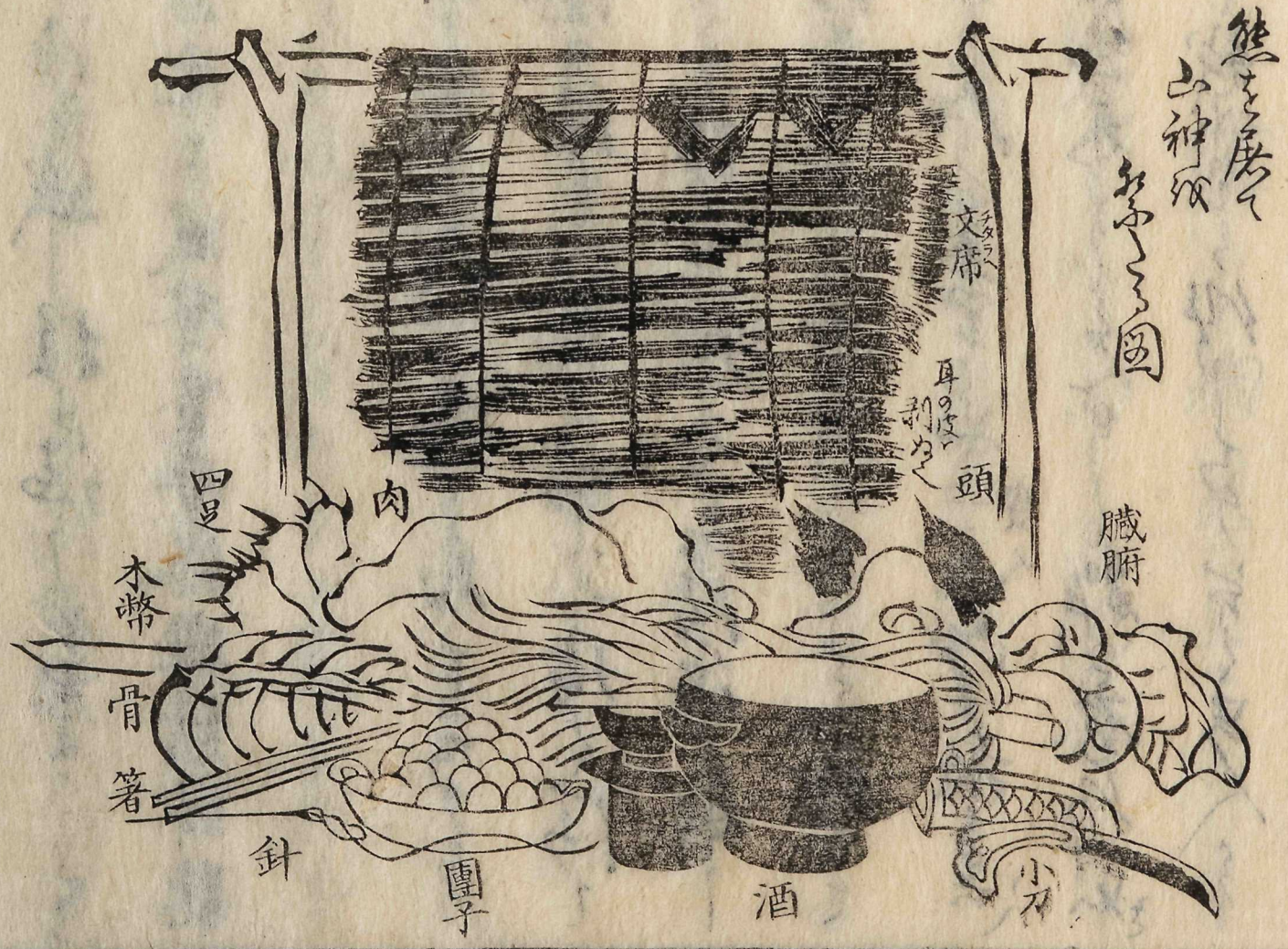
とく別見獣面の郎答（エサラハサラ）して伝家として言る全利なりと思ふ行第

彼於而此解を吸分（アト）に逆（シサル）更（サリカ）二ツ云ふ云まて全和方云
あるとう全和解と云ふ云ふ行れ是を知まれを全和解といふも
冥園曰く鮓答生走獸及牛馬諸畜肝膽之間中畧小者如粟如榛
其狀白色似石非石似骨非骨本艸綱目元祐三年十一月十日大師以病終
于所居十九日火葬得青碧舍利數百粒芝園集通義大師塔銘云また垂仁帝八十
七年丹波國桑田村有犬殺之腹有八尺瓊勾玉日本紀
此二首分著て此條毒衣を侵し肌凍るやうに亡時はなるへシケヌカナン
よ為る此水條石精のルへシへと而骨ふとくまるやうに山より人をやる年号
中ふる連山の奥一つの丸山ふる見去年石精岳て尺ふる山て則テセウ岳
と云て山川條と項と為て東西をレヨコツモンヘツ西を石精南の方チ

トカニウレシヘツ（ユウ）と云高山と肩（カタ）を併べ坂分を顔を清き一面に答
より立上り来る冥の長くとなりて埋（ウモ）れよ流れよ上の本の枝分
出たる富嶽の頂に鉞を懸ける婦一人を一柄のエナヲに折立て忽
身を神の見たまふ富の東くもの上に宿りく
夜ナイタイヘと神り富と
ヘンケヌカナンより上の方も小名多の清き一日市信に嶺よりとく
共冥晌年サツテクヘツと返る出人等天狗等礦を深く赤帯を刷り山海
神等に墓示等へ供へ物を例甚態懇無雑に及ぶ女品珍を物を一同
に掬を手足踏して歌い舞へ足元に去風ムツクリと云物殘の世に
伝へて此界一片の物を化に変りと思ひよ

削竹為牛如紙薄長四五

寸以鐵糸環其端銜于口吹之名曰口琴（番社采風圖考）ととゝ口琴竹片為之長四寸濶三分刳虛之而中存一線之篾為絃首尾横處皆存絃首聯於横尾視横齋處長一分刳下其横處而絃寄於其間如是者三具絃粗細等而下以左手大指食指排持三片之頭張口而置其正中於口間以右手食指中指無名指搏上中下片之絃之尾長處錯落



而彈嘘氣（維西見聞見記）

月出山村夜霧深一椽茅蓬自沈〻風聲驚夢終難結臥聽黒脣弄口琴

廿五日微雨蕭〻ナヨロヨロ若も物憂き余が生涯の過去を思ふ事

〻出る頃より〻時五人の行者（シヤエチ）に内地の酒と称する味ふく強く活て

出来る如く閉ふる熱風と戦ふ内地にて拾を一撮入る活酒（ママ）

経者にて人我出来の後我が行愛の為に土産に書き送る繭にて

嬢〻〻拾を敷〻一撮入れ中にて今日若〻や二人（貴人）出来教室

抓る長を嬢〻に拾を入れ〻出来〻人せ〻の者に如き

物〻家も大〻驚き如何にも殺〻雑〻我〻自ら作〻〻家人〻

世の人と中を重ねて屋敷を構へ千貫と云へる財を蓄へ
如此安人と思ふ事なれ何故我と民衆を云へやと山海の珍を設
て衆と謝し此一條慙愧の為なる為ぬ貧乏者如此
廿六日昨日快晴にて二分を始とし庫枝珍菊苗等の
下葉芽を伸し実に風土の異なる驚き水まして疾く
昨夜飛来雨今朝一尺漲閑看白鷺下漾〻揮波光
夜ヲクルマトマナイなる工カレテカニ家ニ宿ス
廿七日曇霧怪如混沌暮近年少く時ニユアニノホリの如き来や
一足の疲を見て急きヲ二サツヘミヲリ丈を足速て跡を探
さしめるに晴あり一所を尋ね出て如此嶮を駆出て猛獣を見る事

ヒルマエ

ナツ

高さ幾千尺知れず山谷たかく懸崖雪採羆熊膽絶海氷辺
脇胸臍千島侏離歸版藉桀孤鐵戟是鋤犂高き高き峯〻に
て熊を捕るには種々の機式ありて真猟具まち山鉈(タンロマキリ)小刀皮肉を忘れず
恵て出入り加ち奴(メノコ)女の子は鉈(エナコ)木幣をかりチタラベ(文席)を敷き上に乗り山
の神を祭り拝礼をなし後に彼等最初一ときの中
初穂を(アエトモ)を極老として種々の物を捧げ雑〻赤米を献じ神
種々の事を祈り不審を糺すに小頭長(酋長人の勇称)をカイナーと
呼ぶ此山中より来りし人共同じくカイナと呼ぶ尤老地女をカイナ
チーと呼ぶ是を聞や老人の四人カイナと此国を建れ赤のナと
二シハを称て且名字を云て言数の言葉の行時に初人(シヤモ)(イタコ)の言葉の制
貴人

アイノと呼易き紙を放ち給れたる源山（キミタ）の村（コタン）にて和泊（ニヤモコト）に接らせる所
カイナと呼ぶ蝦夷語なり古を考ふるに此國をカイと云ひしなるべ
き歟ことに此地をもカイと称し又カイとのみは夷人自呼其
國曰加伊加伊蓋其地名其地名其人鬚長故用蝦夷字其實非唯
取鰕而名之也（参考熱田縁起頭書）

夷人先年度の示に近き時隣を渉め足を
引きて戈を曳連れて狀弦と雖のみ一揖して此礼狀を奉りたるなるべし
古昔唐山より人ありて吠叶や彼國語の字を書して称呼して
我邦にて称ちる赤蝦夷の川（ニヤイ）と称ちる所なり墨竹（能登）の人（参考釈余）
度世川より入る老人の話を聞て思ひ出せり思
ふ谷河の水を分て船を漕ぐ夜へンケナイより宿し蜂（ビヤ）を取糧とす

廿九日晴夜タカヤシリヨリ宿ヘ出ル稽古ヲ終夜声ヲ聞ク

深山木ヨリ心ヲ尋ネ巣ヲ離レ鳴クウグイスカナ

晦日晴夕方云所ヘ菜ヲ採レ首長ナエナヲ作リ又サシヤンヨヲ立テ

カモイノヒヲ上ル切ヲ切ル扱ヲ出ス月彼（チライノミ）出人皆毎月晦日エナヲ作リテ又サシヤンヨヲ立テ

蝦夷人ノ言ヒサシ天地ノ今宵ヲ夜ノ一トヲ八ツ

七月朝日出人皆ヨリ赤綿烟草針糸皆出シ数日ノ労ヲ謝シ海ヘ出ル

散歩シテ浦ヘ出ル浦ヲ（コロコクシルメノコバ）ウキ五絃琴（トンクル）ノ調ヲ一枝拍ヒ出ル義年海ヘ

流レ漂ヒ病ノ後ヨリ死ヲ待ツ外ノ如ク頃ヲ経テ打消リ後人ヨリ

湾ヲ行ク又出ル所ヲ見ル一二ヲ流シ一ヲ飲ム鈴木高茶毛溪

夷苦境人皆知。毛夷樂地知者誰。終年浮沈波濤際。一朝相忘酣醉時醉

弄夷琴何所說。傾聽只恨言侏離。人言此是源郎事。源郎郎當真可
然。遺風猶見疆弩末。幽荒今存血食祠。多氣山人好奇士。身如孤鴻
度天涯。勝槩遺蹤探討遍。飛泳潛動皆筆之。適侵波瀾收片板。不學
爨底辨琴材。奇器終歸好奇手。珍襲千里徵我詩。嗚呼我詩何足道。
山人好奇理所宜。消埋奇氣人不識。山人發揚千歲垂。願得毛夷彈
琴山人通譯。我為源郎淚一揮。向山履屐（孚莫卯）松生磊落又瀟洒
十年足跡遍天下。六航絶海入夷島。艸行露宿涉山野。好事與吾同
臭味。拾得古琴喜昕我。開匣古色足驚人。滿堂賓客爭進坐。斷絃誰
傳徽外音。焦尾幸免爨下火。知是先王遺愛物。千載湮沒黄塵鎖。一
朝現出豈偶然。珎重只須錦囊裹。天有意以夏變夷。故遺此物助陶

治。欲播　皇化移陋風。一洗髪被與衽左。今日假手吾松生。試鼓南風證虞夏。一齋不堪衆楚咻。無奈鄭衛亂頌雅。嗚呼鐘子不生伯牙死。無復人耳辨洋峩。焦尾斷絃儘亦好。從有彈者少聽者。還君此琴三嘆息。高曲自古真賞寡。

松園塗囚奏人一章

其數[illegible]

況[illegible]上器其為狀阮首琴身。首長九寸有五軫孔。身長四尺。空其腹枯槁不辨木理。寔為五百年前之物。按宋至道中太宗製九絃琴。五絃阮。而蝦人少異其製。別添新譜。為夷樂者可知也。予素有好古癖。亦欣然謂生曰。時已近隆冬。予盍俟密雪閑寂之夜。加絃於其上。為予一試。其音必有清亮。異常者。予藏阿剌吉一壜久矣。與子對坐且鼓且酌。不亦一大韻事乎。況其聽抑揚之節。會峩洋之趣者。舍予而其誰

生領而去。まゝ石塔寺門齋（家）報恩の法汝よ実ゝ流を木を移ゝ法の
琴の剛のまゝ抜ゝ時ゝ待ゝ取出ゝを琴材を拵て琴を成ル振
まゝ深ゝ感ゝ依て一ゝの獨折を添て奉りゝは
思ひあゝ人の為は高きを忘ゝ卑ゝ方ゝ伝の初まゝ
ゝ難ひゝ一行を綴ゝんと方ゝ時若深く恋ゝ世ゝ実國形
の和ゝを求ゝは是ゝ例（タメシ）ゝ是ゝ東海を成んゝ出私ゝ
ゝ此ゝ迷根ゝ者ゝ
二日罪ゝ嘆ゝ生ゝ失ゝ迷て夫婦の縁ゝ分ゝ
今日馬士ゝ人ゝ来ゝや深ゝ嘆（シラウ）ゝ我ゝ馬ゝ附ゝ馬ゝ
為ゝ吹ゝ驚ゝ別ゝ妻ゝ度ゝ度ゝ主人ゝ語ゝ侍ゝ時ゝ大ゝ教

教さるゝ又訪ふ毫毛を盲とし蚊テレホの蟆ゝとして是地の名和人とそこら趣て小方は蟆蚤蚊さるゝ住家の人能く言と附て曰るゝ之を馬鞭るゝ蓋し怪我を為ものゝ　奉使俄羅斯日記ゝ路多蜢如蜂其長徑寸。天無風或覆更熾。行人嘗虚廬帳以納蜢。而宿于外。帚十數齋下。人始得餐盤牛馬流血。身股盡赤馬軟不見深草間見蜢高如邱知其必斃棄不顧矣。是又テレホとり小數千里ゝ及ゝ蟆の嘴利ゝ蚊信ゝ堂若れゝ有無ゝ人家馬を飛して顧も無ゝ夜フウレヘツゝ家甚堅ゝ祇ゝ

掌秘到ゝ忘れて今ゝ我ゝ如ゝ物ゝ内ゝ蔭ゝ

天保日誌　大尾

跋

大乃宮ゝ之ゝ社の神風雲伊齊比之なる
杉浦の何某ゝ物の好くゝ亀乃ゝ宮、我ゝ度
京信あま祢く免を得見地乃形勢をさらすも
いと人風俗情態をゝ法ゝ之ゝ去るゝ比ゝ
爰乃舟何ゝ波し宮其国ゝ人乃ゝすりとな
しゝ教おとゝ比ゝこよるきいきをゝ比ゝ何ゝ計京
様の舟比ゝ比ゝおのれ毛ひゝ京ゝ様ゝくよ
とゝ比ゝるゝゝ乃せゝ比ゝ毛ゝ以ゝ京ゝ之ゝい

さゝの葉をかきたれゆくとしのくれ
春はるかすみつゝ行末
この東はるくれなゐのいゝぬゝてとゝ
おくゆのさゝなみ志賀ぬ家ゝ
久方の月ぞ雲ぬ葉の
拙堂居士三浦淡

成堂文庫
成堂文庫
成堂文庫
成堂文庫

K